

一九五〇年の橋川文三日記

——『日本浪漫派批判序説』以前の橋川文三——

須 藤 健 一*

〈解 説〉

本稿では、戦後日本の政治思想史研究に優れた足跡を刻み、領域横断的な文筆活動で知られる日本政治思想史研究者・文芸評論家橋川文三（一九二二～八三）について、一九五〇年の日記三冊を資料として紹介する。

橋川は、一九二二年一月一日、長崎県対馬に生まれ、その後は父の郷里である広島で育った。広島高等師範学校附属中学校時代から校友会誌『アカシア』に短歌や随筆を発表、第一高等学校文科乙類在学中は文芸部に所属し、詩や批評を執筆すると共に、日本浪漫派、とりわけその中心的存在であった保田與重郎の作品に傾倒する文学青年として成長した。一九四五年九月、東京帝国大学法学部政治学科を卒業した。戦後は、潮流社や弘文堂の編集者として生計を立てつつ、戦後論壇を代表する知識人であり且つ政治学・政治思想史研究の第一人者であった丸山眞男の下で日本政治思想史を学んだ。一九六〇年二月に『日本浪漫派批判序説』を刊行した後、明治大学政治経済学部教授において日本政治思想史を講じながら、三島由紀夫の政治思想的著作「文化防衛論」を巡る一連の論争など、幅広い領域において旺盛な著作活動を行ったが、一九八三年十二月十七日、脳梗塞により六十一歳の若さで急逝した。橋川の主著としては、恩師丸山より「橋川君の最高傑作」と評された『日本浪漫派批判序説』（未来社、一九六〇年）、『歴史と体験——近代日本精神史覚書』（春秋社、一九六四年）、『近代日本政治思想の諸相』（未来社、一九六八年）、『ナショナリズム——その神話と論理』（紀伊國屋書店、一九六八年）、『柳田国男——その人間と思想』（講談社、一九七七年）などが挙げられる。

橋川の伝記的事実については、橋川本人の手になる「ロマン派へ接近の頃」（『橋川文三著作集』第一巻所収、筑摩書房、一九八五年）、「対馬幻想行」、「戦中の読書」、「戦争と私」（『橋川文三

*すとう けんいち 京都大学博士（法学）

著作集』第八卷所収、筑摩書房、一九八六年）、遠藤英雄・松本健一編「橋川文三による橋川文三伝」（『思想の科学 第四十九号 主題 橋川文三研究』所収、思想の科学社、一九八四年）や、丸山眞男による最大の橋川批判と言える「『日本浪漫派批判序説』以前のこと」（『丸山眞男集』第十二卷所収、岩波書店、一九九六年）を参照のこと。さらには、明治大学政治経済学部で橋川ゼミの学生であった作家・編集者宮嶋繁明の『三島由紀夫と橋川文三』（弦書房、二〇〇五年）、『橋川文三——日本浪漫派の精神』（弦書房、二〇一四年）、『橋川文三——野戦攻城の思想』（弦書房、二〇二〇年）が挙げられる。特に『橋川文三——日本浪漫派の精神』は、「事実考証の精密化」という観点から優れた伝記研究である。

橋川思想に関する研究としては、平野敬和『丸山眞男と橋川文三——『戦後思想』への問い』（教育評論社、二〇一四年）が挙げられる。平野の著作は、丸山眞男の思想を相対化する視座を持ち得た稀有な思想家として橋川を高く評価した先駆的な思想史研究である。

近年の研究としては、拙著『橋川文三の政治思想——三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男との思想的交錯』（慶應義塾大学出版会、二〇二四年）が挙げられる。『橋川文三の政治思想——三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男との思想的交錯』では、橋川文三の政治思想の全体像を、三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男という、戦後日本の文学・政治学・民俗学において傑出した業績を遺した三者との思想的交錯という視座から、包括的・総合的に考察することを試みた。橋川の生涯における思想的立場は、丸山政治学における近代の思想、理性の思想との批判的対決を経て、柳田民俗学における保守の思想を受容し、日本近代の隘路を美的行動主義によって突破しようとする三島文学における突破の思想を克服したのであった。橋川は、保守の思想の受容後も西郷隆盛論（「西郷隆盛の反動性と革命性」）や右翼思想家渥美勝論（『昭和維新試論』）で突破の思想への共感を示唆していたが、いずれの思想にも安易には与えず、近代日本の抱える様々な課題を克服するための新たな思想を模索し続けた。

本資料は、橋川が生前書き残した一九五〇年二月一三日から六月一五日までの日記の抄出である。

橋川日記全体を俯瞰的に眺めた場合、大別して一九五〇年代、一九六〇年代、一九七〇年代以降の三期に分けて傾向が分類できる。一九五〇年代の日記は、橋川の私的な交流や内省的・感情的な思索が多く記述されており、私的色彩が濃厚なまさに日記と呼ぶべき内容である。次に一九六〇年代の日記は、私的な交流や思索に関する記述はやや少なくなり、政治思想史研究者としての読書記録に関する記述が多く、公的色彩が濃厚な研究記録となっている。最後に一九七〇年代以降の日記は、橋川の体調不良なども影響しているのであろうが、文章の長さは徐々に短くなり（且つ、判読自体が極めて困難になる）日々の行動記録に関する記述が大部分を占め、日記というよりは行動日誌・備忘録・日録といった傾向が強くなる。S.Nへの情熱的な愛情や文学的・哲学的思索が多数綴られた本資料は、一九五〇年代における橋川日記の傾向を

証明する重要な資料である。

さらに、本資料は、先述した『『日本浪漫派批判序説』以前のこと』（一九八六年）に対する有効な反証となり得る資料である。丸山は同インタビューの「橋川君と女性たち」で、橋川の結婚以前の女性遍歴について触れ、橋川の多彩な女性関係が、共産党への入党及び脱党の経緯と相似しており、橋川の「不決断主義」という資質と関係しているため、橋川を論じる上では重要であるとも言えるとしている。この論点について筆者は、橋川の著作から感受される誠実性とシャイネスから懐疑的であったが、本資料から浮き彫りにされる橋川像は、丸山が語った橋川像とは真逆のそれである。

また、政治思想史研究の観点から見た本資料の意義は、橋川と丸山との深い信頼関係と親密な交流に関する叙述である。橋川と丸山は終生良好な関係を保っていたが、本資料の内容から、『日本浪漫派批判序説』成立前の戦後初期の段階で深い信頼関係を形成していたことが明らかになった。橋川は、S.N.を信頼する丸山に会わせたいと考え、実際に丸山とS.N.との会見は実現した。結果としてS.N.は丸山を非常に信用し、丸山に対して——橋川の主観では橋川に対する以上に——様々なことを話したようである。

本資料は、従来、『日本浪漫派批判序説』以前の研究が寡少であった橋川研究に有用な文献となるのみならず、所謂「戦中世代」の戦後初期における精神史を研究する上でも重要な資料である。

〈凡 例〉

- ・本資料は、慶應義塾福沢研究センター「橋川文庫」収蔵資料である¹⁾。注釈の「慶應義塾福沢研究センター蔵・橋川文三関係資料目録」の後に付されている表記は、① 保存箱の番号、② 資料の形態、③ 表題（内容）の順に記載したものである。
- ・橋川日記は独特の崩し字で書かれており、判読し得ない箇所が多いため、その部分について文字数がわかる場合は〔何字不明〕、文字数がわからない場合は〔不明〕と表記した。
- ・日記の一部には、後に橋川純子夫人が清書したと推定される解読内容が黒鉛筆で付されており、参考とさせていただいた。
- ・日記という性質上、覚え書きやメモの箇所も多く、必ずしも論理的に意味が読み取れない箇所があるが、その部分は原文通りのまま掲載した。なお、本文中の傍点が付されている箇所、傍線が引かれている箇所は原文通りである。
- ・【 】は内容を補足説明するために筆者が付したものである。
- ・明らかに誤字と考えられる箇所は訂正した上で、漢字は新字体、旧仮名遣いは新仮名遣いに統一し、句読点も適宜補っている。

- ・今回紹介する資料は、井上光晴編集第三次季刊『辺境』第一〇号（一九八九年七月終刊号）に掲載された橋川文三「日記 1949-1951」で既に抄出、公開されている部分以外の、未公開の新資料である。注釈で本資料の各頁が「日記 1949-1951」のどの部分に当たるかを示しているため、「日記 1949-1951」と併読されたい。
- ・「日記 1949-1951」についても、本資料解説の参考として活用させていただいた。
- ・本資料の投稿及び掲載に際しては、橋川文三の著作権者の許諾を得た。
- ・本資料の画像使用に際しては、慶應義塾福沢研究センターの許諾を得た。

〈翻 刻〉

1 ノート *gedanke u. gedichte* I (Ⅷ) 13 Feb. 一九五〇～8 March.²⁾

一九五〇年二月一三日から三月八日までの日記である。大学ノートを使用し、表紙のタイトル部分に三行に分けて「*gedanke u. gedichte* I (Ⅷ)」と横書きで書かれている。また表紙の中央部分に「13 Feb. 一九五〇～8 March.」と書かれており、その上部に「(50)」と赤鉛筆で書かれている。本文はノートを横向きにし、青インクの万年筆又はボールペンを用いて縦書きで書かれている。

一九五〇年二月一三日 (月)³⁾

十月十九日からまだ四ヶ月にしかならぬのは不思議なようだ。

二月一三日 (月)⁴⁾

S のことも考えた。S が本当に羨望嫉妬するに値するような感情を誰かにいだくならいい。S が本当に人間らしく大きくなるならいい。逆に S の行動は少し、自惚のまじった精神的ニンフォマニアで下らない相手ばかり相手にしている。それでしかも、自足して個性的とか何とか思っている。僕の S に対するワリキレない気持——憐みと愛着と若干の怒りと。どうしたらいいか。僕の中で高められ解決されねばならぬ。

二月一三日 (月)⁵⁾

S に対して僕はあくまで公正にかつ S のふらふらに動かされぬ態度で接せねばならぬ。S の中のよい部分、それを美しくのぼせるための寛大な援助者にならねばならぬ。僕には僕の接し方がある。それを忍耐づよく接近することのみが僕と S の間の関係であろう。

二月一四日（火）⁶⁾

- A. Seo, ということは現実にどのくらいの意義をもっているか？
- B. 同級生と H・S の関係？
- C. 実際の purge があった時、僕はどのような責任をそれに対してもつか？

二月一四日（火）⁷⁾

現にこれを指てきした S・N にもその面がある。

二月一四日（火）⁸⁾

だから僕は女との動物的な＝コンプレックス的な交渉に良心を感じなかったし、「つかいこみ」もいつか平和的に解決できると思ったし、それらのことを同じように考えていた。いわば一切の行動にプリンシプルをもたないというプリンシプルをもっていた。それを N に G [不明] と見抜かれている。

それから僕は N のかいた「S の信用を回復するのはカンタンだ」ということに思い当った。そこからどういう風に考えるのかわからない。唯何となくなぞをとくみたいにそれらを考えていたと思う。その時まで S は僕の sexual な関係＝共存ということをいってるのだと考えた。S しか愛さない、誰とも何もしないということを S になっとくさせればいいのか？と考えた。それからいろいろ S のいったことなどを思い浮かべてみた。それはたしかのように思われた。「僕はあなたを、あなたのみをかわらず精神と身体をもって愛している」という表現をせねばならぬのかと思った。他の女など関心少しもありませんといわねばならぬのかと思った。S は恐ろしく平凡な女性だということをこの頃少しわかっていたところだからこの発見は僕の胸の中で思わず思い出させた。しかしそれは大変なことだという風にも思った。単純さということ——僕が胸の中でハッとしたくらい平凡きまわるプリンシプル——それが道徳なのではないか？人間の人間同士のぎりぎりの知恵がそれなのか？僕は息をつめるような思いがした。何という美しい平凡な単純さ！しかもそれが生活の哲学や、深さや、その他すべての人間世界のことがらであるのか僕は一寸こうあんした。そして S に向かって、それを本当に手紙に打ちあけねばならぬと思った。いつものいかめしい記書伝達ではなく、普通の愛する男の甘さと純粹さをもって！僕は今朝 S のところへ行ってみることを考えた。しかしあわてることもないと思った。

この一年 S しか愛さなかった。君のことでこの四ヶ月殆ど休みなく苦しんだ。七冊のノートをかいた。僕はなお君が結婚するまでは、君と結婚したいという気持をもっている。君と別れてから、僕は女の手をにぎったこともない。

二月一五日（水）⁹⁾

9時S方による土曜日（十一日）業務中泊込の由、寮のようなところ？一寸つらい気持ちをい
いて帰る。

二月一五日（水）¹⁰⁾

Sは殆どそういうギモンをたない。よくいえば現実主義，わるくいえば享樂主義。一方では，
日常性のカンが発達しているが，知的といわれることがらに殆ど関心をもたない。エゴを中心
にまだまだ渦まいてるところだ。あれはよくのびるだろうか？

夜Sに手紙をかいだ。愛していること，結婚したい気持ちをいつまでももつだろうということ。
「愛していること，感謝していること」を忘れないでほしいということ。不可能でも正しい人
間の友情は成立させたいということ。

Sの生活はいまだ形をなさぬから，このような一種の申込には一寸ギモンもあるが今の僕の最
も深いキモチをつたえるといういみでかいだ。

二月一六日（木）¹¹⁾

Sに昨夜の手紙を出す。

二月一六日（木）¹²⁾

そのかえりSがひとりとびはなれて行くような感じで一寸さびしかったのだが，それぞれ人
間の世界の外にゆくのもあるまい。

問題は，Sの享樂的な（印象的に）日常性への盲従傾向だ。物と楽しみと，こういうものに世
間の人には何ら話が通じない。しかも植民地化という危機を国がはらんでいる時，Sの中の思
いきりのいい個人主義は一寸処理しかねる。それは案外凡俗な事大主義ともなる。Sの職歴は
すべて米軍半官事業であったということ。だから普通の女の友達ができない。どこかで自ら高
しとしている。

二月一九日（日）¹³⁾

・Sが今日あたりこの間の手紙見るはずだ。昨夜うつつにあんなところでは解決できるはずは
ない，と話したように思う。Sの性格の問題だ。

・片づけてるときSが去年の一月にはじめて Muto（武藤）にあてた手紙が出て来た。一寸幸
福に偶然のように思う。

二月一九日（日）¹⁴⁾

妙子さんは今日一寸おすまして、それから洋子さんに会いたいと思った。

丸山さん方不在、岩波の平和会から尾崎さん方不在をまわってかえる。一旦かえって夕方から赤坂のそこへゆこうと思う。

二月一九日（日）¹⁵⁾

かれの家にゆくと僕らしくなく戸のあけた手にまで神経をつかう。小田さんやちえ子さんやみんなどうしてあんないい人ばかりなのだろう。長明も一頃よりしっかりしていた。アメリカンズ出版の件について僕は賛成。

Sの女学校友達、なんとか道子（21）は日劇のおどり子なんかやっているという。「Sさんは学校の時からかわっていた」そうだ。Sの学校時代をなぜか知りたいと思う。

二月二〇日（月）¹⁶⁾

昨日あたりSから手紙か電話か返事がありそうなものと思っているので、一寸さびしい。まったくわがままというより無鉄砲だろう。手のつけようがない。あれで一生勉強という。奴どうするつもりなんだろう。この女の勉強慾はすてばちで甘いところがあるようだ。ということは今yesがあってもそれはできない。この点は一寸念を押したいところだが、まあいいだろう。

二月二〇日（月）¹⁷⁾

ビリチャンは僕のことをおっかないといっていたそうだ。しかしお安くなかったという。かえり道、Sを思う。明日、Sのところへ強行訪問しようと決心する。Sを、やはり僕は、全て愛している。

二月二一日（火）¹⁸⁾

昨日の決心は少し無茶だ。祈るしかない。「君はね、誰かが長く愛してやらないといけない人なんだよ」

何故愛するか？

- ・あのようなタイプの生長に対する知的関心（それは非常に人間について考えさせる）
- ・想像がたゆたうのはいやだし、よくないが、それは意志と仕事に対する観念に反対物を求めるからその面でもプラスになる。
- ・一つのながい享楽を背景として生きること。

二月二一日 (火)¹⁹⁾

神山氏に会う。

2時過ぎ、まあ子さんが

野島さんがきてるわよ。これかえしておくこと (わりこみ)

……手紙かきますっていって下さい

野島さんいつ頃来たの。9時頃です。

用事があってジープで来たんですって。外套も着てないでさむくないのといったら、いそいできたからさむくないんですって…

その人どこにつとめてるの？

まあちゃんが不キゲンそうに見えたのと、切口上みたいにいったので、Sが不快な印象を与えたのじゃないかと思う。たしかにまあ坊とはちがった世界で生きているのだから。女同士としては何か敏感に感じるのかもしれない。或いは余計な心理がそのように考えさせるのかも……いつか〔四字不明〕にどなりこんでいた時もそう……

手紙を日曜日ころ見たのだろう。手紙だけでもって行ってるのだろうか？今朝みえた時には僕のところへくるつもりがはっきりあったことはたしかだ。しかし他の本やら身廻品などももって行ってるのか？一体どういう風なところにいるのかわからぬのと、東京へ用事などというのはどういうことなのかわからぬのが僕を一寸惑乱させる。そのあとのS会議の時も、意志力の問題と思う。大いに念じ集中してみた。旨くはゆかない。…かんたんな手紙でもかいておけばいいのに。例のように無常なのか、それとも僕の中の重圧がそうさせるのか？

そしてSのことを考えると意志という物は空しくなるのだろう。その予感——Sは恐らく無我夢中で彼のこともよくわかってないし、或はSがアメリカニズムの中でゆるんでいるということにあたるのかも知れない。

僕のこの未決定部分の中で僕をつよくせねばならぬ。というより、それはSの中に、というよりも、僕の中にある問題なのだ。

Sはながく一つの生活をつづけられない。(いいみでもわるいいみでも) だから今の仕事もやはりながくないだろうし、たとえ僕の中の夢が実現しても恐らくそれもダメになるに決まっている。そしてSは本当に自分の足もとをみつめ始めるのだろう。その点なら、僕は惑乱しないですむ。

Sのビジネス精神ということ。いいみの個人主義の面はかえる。(しかし彼女と接していると、その面はむしろつめたい教科書風のお説教のようにきこえる。)

その反面のSの中の享楽主義——これはSが自らのしんでいるようにみえる。

二月二三日（木）²⁰⁾

ふと S から手紙が来るころだと思うと寂しい感じがする。S が去ろうともう気にしない（なしくずし）が、やはりもの足りなかった春がすぎてゆくようだ。しかし実際には今日はあたたかで、やはり春がめぐってくる。秋以来、S 一人を思いつづける。珍しく僕には女がない。もう前のように女が出来ないだろう。やさしい雰囲気のみをつくってゆくことだろう。

二月二四日（金）²¹⁾

僕のこと、ゲシヌングスとフューレンとの問題——前者では共通、後者では「それによって生きる——世界の為とか何にかではない——」ということ。

二月二四日（金）²²⁾

西洋文明史の源流にしたがい、よみながら S のことを考える。ポリス（日本の家族社会）からの開放＝個人主義＝快楽主義＝一種の機械化への叛逆などとしてあるいみではいかにプラスとなるが創造力ではないということなど比べ合って面白かった。

個人主義、エピキュアニズム、功利主義 etc はよく考えねばならない。僕は少しリアリズムをバカにするようなところがあるから…実際はそうなのに！？……

二月二四日（金）²³⁾

今日も S が手紙くれない。くれさえすればいいのにね！

二月二四日（金）²⁴⁾

S がつねに僕の思考の具体的な例としてうかんでいる。コスモポリタニズム、人間、KP、快楽、苦悩、自由 etc というものの姿が、S をめぐって旋回する。今、それを押しひろめ、僕の中に一つの世界大の「世界」をつくりあげること。それが僕の一時的な目的である。そしてそのようなりカイでは十分ではない。それを人類的問いとしてハイクするとともにつねに Anwenden【理論を現実に応用】することが必要である。

二月二六日（日）²⁵⁾

やはり S のことを思う。のちになって、いろいろわかることがある。それを S に告げたいと思う。しかしほくがわかっただけではダメなのだし、S の側にも今は固定した考えがつかよくなるようだから変化がないと思う。逆に S にとってのものちになってわかることがあるだろう。めいめいが、めいめいのキメテを負ってゆくより仕方がない。そのいみでは個人をべつ視することもない。僕の S への感情の中には子供っぽくハリあうようなところがあるからそれはお

かしいことだ。

ともかく先日（16日）の手紙を出してから、僕のSへの態度は一つの発展をとげた。あいたいと思うけれど、その結果や美的ないみを判断できるように平気になった。あってもお互いかわりはないだろう。…だからめいめいの道をゆけばいいのだが、Sはなげやりなのか、気重なのか、軽いサインすら送らないのが気がかりだ。

二月二十七日（月）²⁶⁾

それと22の少女が僕に指摘したのだと思うと妙に苦しくなつかしくなる。Sよ、君が僕の中でつねに生きている。

二月二十七日（月）²⁷⁾

Sなどはそういういみでトウが少したっている。素直でのびのびしていない。かわいそうだと思う。20くらいと僕くらいの間でどちらにもかたよれないでいるのだ。「一寸忘れられないかおだから」Sのことを憶えているという。

二月二十八日（火）²⁸⁾

Sはやはりまちがっている。少なくとも大へんまわり道をする。かわいそうと思う。しかしSは今恐らくとざされている。

passageしてそのまま、Sの返事がないこと、これは僕の「勝ち」と判断していいと思う。愛し、いとしみ、みえというものがつねにかった。Sはセンパクで理智がない。

三月一日（水）²⁹⁾

夜Sが沢山友達と家に来ている夢を見る。

三月一日（水）³⁰⁾

北27……12～3・13日までのこと。ぜひこいという。[六字不明]に比べて少し線がボケてる感じがする。しかしよっているのだし、男の場合は少女のようにつよくゆかない。

三月二日（木）³¹⁾

昨夜Sの夢をみる。さびしそうな姿。僕のことを気に入らぬという。[二字不明]の方がいいというようなことをいっていた。

三月五日（日）³²⁾

Sに会いたいがかの女返事をくれない。一ヶ月会わないのは初めて…よくねる時など考える。
健康であれ！

三月六日（月）³³⁾

それはSと比べているのだ。やはりSがなつかしく思われる。あの野郎何を考えてるんだろう？

三月七日（火）³⁴⁾

朝，S，弟より手紙（Sの手紙3・6の12時）

Sに返事かく。

お手紙有難う。元気で安心しております。あなたのお手紙には全く同感です。だから細かいことは口にでません。われわれ周囲では鈴木らのところに一寸したトラブルがあったほかかわったことありません。中村さんは今日あたり名古屋へかえたことでしょう。丸山さんにはこれまで以上、お世話になっております。この点「不明」にはいい出しにくいことですが、自分の力で「不明」【前後の文脈から文筆だけで生計を立てるという趣旨の言葉が入ると解される】ようになりうるか、ためしてみようと思っております。それでポール・ロブソンという黒人歌手の夫人の書物の出版をやってみようと思います。これは僕の独力でやるつもりでアメリカからの返信をまちわびています。又、アグネス・スメドレーという女性活動家の中国史のほんやく。これは尾崎楊子さんがそのテキストを持っているので、かの女の夫君と二人で共訳します。旨くゆけば世界評論から出します。

丸山さんからも仕事をもらっています。これは古典の翻訳で可なりかかります。仕事の関係であたらしい友達もでき、正直なところ貴女とはなれているのが一寸さびしいけれど毎日充実した生活をしております。人間、愛、人生、歴史 etc の本当のことがだんだんわかってくるようで落着いております。

タイプを洋子さん達とやる計画や、ワ「三字不明」のグループをつくることも一しょにやっています。要するに貴女のいったいろいろなことを、僕の中で生かしてみようと思っています。僕の気持からいえば、先日僕から手紙を出していろいろのもやもやが、なくなったようで、その必要もなかったと思いますが、区切りをつけるためにやはりよかったと思っています。いろいろ迷惑かけて御免なさい。ではお元気で。

本当にいつか会いましょう。

三月七日

茂子様

「貴女は僕の中に生きています。それでかえってお会いしたい気持ちもなくなったのです。不思議な気持です。」ということのかいておけばよかったと思った。かの女は強情だから日常のゴーマンな強気な態度のことを自分でごまかしているようにしている。

三月七日（火）³⁵⁾

Sの手紙は病的。いつもいつも病み上がりのように力よくぼんやりしている。どうしてあんなのだろう。どうしてあのように、[三字不明]でニヒルになるのだろう。家庭のことも、学校のこともあるに違いないが……

妙子女史がSのニヒルにヒュマニスティクに愛着をもつことはいけないと今夜いろいろいったが、結果においてどうなるかもわからぬ。

どうもわからぬ。結局Sの手紙ことを考えたりしてるらしいが、そんなに神経のどこかにSのことを考えるのだろうか？単純に空腹（今日は昼しかくってない）と紅茶の飲みすぎだろうか？3時頃にとうとうおさまる。頭が少しおかしいようだが、それでもねむれない。ほんやくでもしよう。

日付不明【日記4ページ目、この部分のみノートを縦向きにし、横書きで記載】

Let me See! I want to see such a man! Really! I admire to meet a stoic! Epictetus

2 ノート Reflexion u. Gedanke (No.9) March 8 一九五〇. April 8³⁶⁾

一九五〇年三月八日から四月八日までの日記である。大学ノートを使用し、表紙のタイトル部分に「Reflexion u. Gedanke (No.9)」と横書きで書かれている。また表紙の中央部分に二行に分けて「March 8 1950」, 「April 8」(April 8のみ赤鉛筆)と書かれている。本文はノートを横向きにし、青インクの万年筆又はボールペンを用いて縦書きで書かれている。

三月八日（水）³⁷⁾

たとえばSをして現在のNihilに到らしめたもの、Manはすべていやだといつかいわしめたもの、それが僕の責任ではないかと思う。神秘的なようで単純な人間存在……妙につかれたような気持がする。Sのような性格は、案外Sexualなものから解釈しうるかも知れぬと思うと、ふっと及びがたい人間のAbyssalをReminderするような気持がする。

三月八日（水）³⁸⁾

僕Sのこと（時計のことから）にふれ、一年前とそっくり同じだと断定する。人間的にえらくなったなどということも、結局客観的には何のいみももたない。Sは依然として自分のコースを決めず、同じように女給のようなことをやっている。大切な時期なのにかわいそうだという。N氏例によって「ああそうかな」

三月八日（水）³⁹⁾

Sのトケイ修繕してわたしてやること。カツマ君とホーマーにつれてゆくこと。

三月九日（木）⁴⁰⁾

Sには昨日の手紙必ずしも親切ではなかったと思う。しかし自分から「他人のことには一切」といっているのだから仕方がない。本当はSはコドクな叛逆児にすぎない。その力——自信がもてないでさびしがっているのだ。少女の多くのタイプの中の一つなのだ。個性と教養と力と、それをえたいと希う多くの少女達の不幸——家庭と男性の無理解が原因なのだ。Sは学校のコースに入った方がいいのだ。前の学校は自分からなげて了った。それであせっているのかも知れない。表面では逆に、人生に価値をおきすぎる性向があるのだろう。だから逆に逆にとつまらぬ仕事をくいちらす結果になる。僕に余力があればSをmedicine関係の学校に行かせたい。それが一番Sに合っているのだから。もしSが今のままのようだと、それこそ偶然の幸運をつかむ以外にSは進歩しないだろう。又はSを一生愛してやる男性が存在すること。それはSに平凡な生活のコースの中での成長を可能たらしめよう。

三月一〇日（金）⁴¹⁾

朝Sに手紙出す。

前略——一昨日国立へゆき中村さんに会いました。貴女のとけいどこに行ったかさっぱりわからないので、こわれた方をもってかえりました。昨日銀座の日本堂で見てもらったらまだ充分使えるとのこと。なおしてもらうように頼みました。14日にはできるそうです。それでよければ機会を作っておとどけするか、送るかしましょう。小柳さんは春の個展の制作に一生けん命のようです。四、五点みせてもらいましたが、あの人の画風がわかるようで、面白く思いました。川越さんという女子大を出た人に会いましたが、なかなか熱心な人で、画を習いたがっている女の人の心がわかったように思いました。

報告（1）鈴木家のトラブルは、昨日三日ぶりによったら、やはりダメらしいのです。わかれるより仕方ないのでしょう。それにしても女の方は例外なく可愛想に思われます。

昨日川越さんが来たので、ぶらぶら銀座を歩き、丸善によってかえりに久しぶりに山田さんの

ところによってみました。いつも元気ですね。少しこの頃話し易くなりました。広川のフィアンセとの間で相当苦勞しているようですが、要するにまだ Marry の成立に自信がもてないようです。丸善にいたるときに美しい本が沢山あって一寸ほしいと——まず¥200 から一寸ほしいのになると¥500, ¥600, ¥1,000 とずらずらあります。ほんやくで金をもらったら、いろいろ本もかいたいし、弟を見舞いに帰広もしたいと思います。4 月は丸山先生と伊豆へ Trip するプランもその先のことです。

中村さんは原書講読をやるなら世話してもいいとのこと。余り自信もないが、丸山さんにも相談して、場合によってはそうするかも知れません。いろいろ、今後のこともふくめて、今年はいいい年にしたいと希っていますが、KP のこともあり、[不明]。それと日常身辺のことを大切によく考えること、弟のこと、それらも注意しなければなりません。しかし、僕にそんなことができるかどうか。改めて貴女のことを思うと、心からなつかしくよかったと思います。もうすっかり貴女は僕の中に生きていて、それを現実の貴女は一層高めたりするような感じ。貴女がどんな道を選ぶか、ふっと貴女のなかのニヒルを感じて、それが貴女を悪くしないかと余計なことですが心配したりします。

それではいつかお会いすることをたのしみにおしゃべりをやめます。いつでもお約束できますから、いつでも時と処を連絡して下さい。それから思い出したのですが、[不明]……。ではお元気で、無理しないようにして下さい。

三月一〇日。

三月一日 (土)⁴²⁾

小さな奇妙な事実がここ二、三日あるから書きとめておく。それは S の手紙と、それについて僕の二つの手紙を暇があればくりかえしくりかえしよんでいることだ。S の手紙ならわかるが、僕自身の手紙を何故そんなによむのかさっぱりわからぬ。S がいないからこれを Dialogue に代用しているかも知れぬが、どうにも扱いかねる心理的 Tendency である。丁度タバコをむやみに吸ってるようで、健康でないと思う。これは些細なことだが、にえきらぬ悪いくせである！

三月一日 (土)⁴³⁾

S を僕が本当に愛するようになり、S が僕に冷淡（時として高踏的に無礼！）になってから僕は苦しい気持を何ヶ月ももちつづけた。それが、S の府中行によりその中に一つテンキを与えられ、空間的にとおくなったという感じが、僕の気持にどこかでふくまれるようになった。それで僕は S に求愛の手紙を改めてかいた。それから殆ど、S からの返信をキタイもせぬような気持ですごした。何だか僕の中に S の生命が部分的にしろ移って来て、その他の、いわば僕に

とって不可能な部分について、いつまでも心を労するものではないということがわかり始めた。それとともに、愛する側のつよさが殆ど、愛されるものの姿を愚かしく見せるという認識が、僕の中にも生れ始めた。それと伴って僕はSのことを客観視できるようになった。それがかなり早いころに、女についてはバカ同然だというSのことだが、今逆にわかるような気持がする。しかしSは、僕をわかろうという努力を決して自分にはしなかったのだから、そのような知的な差別もよけい僕のSへの決別を促進するようにも思われる。Sがかりに僕の求愛に応じたとしたら、僕はどうしよう？又逆の関係になって無視し始めるかも知れないのだ。結局Sは未完成であり、完成の可能な素質をつよさによって自らカヴァーしえないでいるのだから、結婚の適当な相手ではないだろう。だから今はSに特別に会う必要もないし、Sを特別に愛しても仕方がないのだ。できるかぎり普通のつきあいですませればいいのだし、手紙なども必要なこと以外には出さないようにしよう。ことにこちらから会うことを考えるのはムダだからやめること。何故なら、Sがもしあいたくないなら会うべきではないし、僕の方から会ってもさし当っては、こうしてSのことを考えているより以上の意味はもたないだろうから。殊にSの「忠告」というやつ。もし僕がSを愛しているのでなかったら恐らく、つまらないことだ。そして最近の手紙の調子も、僕には愚かしい高ぶり（ヒステリー）に思われてならない。しかしそれは考えてはならないことだ。丸山さんがいっていた「天の声」という思想——Sがもし僕を又愛し始めたら、それは不思議な悲劇になるような感じがする。いずれもしっかりしていないのだから唯気持の上で好きだ嫌いだといってもつまらないことになるにきまっている。愛における理性の問題——それが最もむつかしいのだ。

僕にとって一ばん何がいいか？……Sには最も普通のいみで親切であること……かの女の不正（と僕に思われること）に対して普通に寛大であること。

僕は僕自身の身体と精神をもって全く新しい生活の努力を始めねばならない。……その際、君の解釈を弄んではいけないことだ。専ら実践の意識によって新しくなってゆくこと。

Sに対し親切であるということ。（具体的に）

- A. 再びトケイを送ってやること。
- B. 僕の気持からでなく、実際の行いで親切にすること。（なんじ与えよ——gentle）
- C. 4月1日には何か贈りものをする。
- D. できたら丸山さんに一度会わせる。

しかし僕はSのようにその後手紙を見て「何の感情も動かない」というようにはなりたくない。ゲーテがシュタイン夫人と別れてのちにも、あくまで公正な手紙をかいているように……

それは公正の観念の明確なハイクとその正しい発展を必要とする。S には未完とともに、観念のひずみがある。それは自分の個性に自信がないからだ。

本当は S が正常な学問のコースにゆけるようにするのが一番いいのだ。しかしそれは不可能に近いし、又すべての人間に親切でいることはできないのだ。(こんなこと S もいっていた。一時にどれもこれもできないということ……) 唯善意をもて！ということになる。(これも S と話したことだった。)

僕は新しい仕事とともに、新しい愛情を必要とする。S とのことは、僕の苦しかった step に要約される。生命のふかみには一つの限界があり、それが更に大きくなるには、一度縮まらねばならない。僕は S の方ではなく、別の方にふくらまねばならない。しかし愛情を求めてはならない。僕の新しい仕事の中で、僕が意志をもってゆくならば、それが美しい愛情の反映の中に包まれるかも知れない。それを意識することはむづかしい。それが意識され、しかも美しいものであるためには「最も健全な愛情と知恵 (ゲーテ)」むしろ唯仕事を！

KP としての僕を愛することから改めよう。

僕の兄弟や母や友人や仕事でつながった人を愛することから……

本当にそれらの人にこれから、それによって僕のこともわかるようになるだろう。その根底には原理を探究する *liebe* が絶対に必要である。その手段としてのいろいろなこと、たとえば今考えているロシア語やタイプ、哲学史、日本思想史、政治思想史 etc の勉強がやはり僕の愛情に絶対に必要なのだ。

それらのことを僕に教えてくれた人は——ゲーテ、スピノザ、エピクテトス etc。それはすべて、S への愛情の中から導かれるものである。ロマン・ロラン、デカルトが気づかれながら、それらの人らにきくことはできなかった。

愛情がもっとも美しく崇高でありうるのは、お互いがお互いを決して己れの所有物とは考えず、むしろ「神」の所有物であるとみなしうる時！その理解力とともに、そのような存在としての生命の *glad* を享受しうる能力この両者が必要である。

一人の人間を愛しつづけるのは、美事な才能であるか至高の本性であるかのいずれかだ。

この思考は、人間は愛における *Entsagung* の思想に導く。

僕の求愛の手紙は、というよりも、むしろ僕の心境の説明にすぎないのだから、「ああそう」とうけとられることで充分なのだ。それをわざわざSのように、何の感情も動かぬなどということは不要だし、いわば少しSの頭のカタサを示している。さてそれでも僕が誰か他の人を愛し始めたとしたら、どうなるだろう？ Sがmanや誰かのことで、僕に無礼であったように無礼であってはならないだろう。それは親切さというものがありあまり感じられなかったから。それは本当のgladではないだろう。Sがああ頃示した態度は、むしろ憎悪か敵意に近いようであり、仮装の病的なふるまいであったようだから、僕は買えないし、僕はそのような美辞麗句はいらない。

——といっても一寸わからぬ。Sはむしろ後半においてやさしい風でもあった。それでいいのだろう。拒まず、咎めずに、黙って己れの正しいと思うことをやること。あまり説明しても始まらないと思われる時には沈黙、話ができる時には話せばいいのだろう。

僕だって少しバカバカしいと思うだろう。（そんな手紙をもらったら……）けれど悪い人じゃないしかわいいとも思うだろう。殊にその人がどこかすぐれたところをもっている場合……

未来のこと、結婚のことなど、あんな風にSが返事するのは人のことをやはりバカにしているやうなくせがあるのか、それとも少し自惚れているかだろう。

自分を進めない愛情は正しい愛情でなく、必ず不純なものをもっている。僕が今Sに対する気持の中には、そのような要素があったのだ。

結論として愛することのみがその人間を大きくする。僕はたしかにかわったと意識する。しかし僕の外観にまでそれがあらわれるのは少したってからだろう。Sに会うにしてもそういう風になってからでなければ無意味だと思う。そのためのメルクマールとして考えられること。

- a. 僕が自分の中の欠点（というよりカゲ）を明るみへ出せる時。
- b. それにはすぐ生活的（経済的）なものが関係してくる。その面の準備。
- c. 具体的には、煙草・酒などの節度に自信がもてるようになった時。
- d. 僕の新生活設計が講師につく時。大体五月頃になるだろう。
- e. 日常義務の正しい遂行（！）

要するにたいへんいろいろなことを僕はやらねばならないし、とすればSにながく会えなくなると思う。それはそれで仕方がない。甘ったれた酒をのむような愛情はアキアキしているわけじゃないか！ そのくせ酒という奴と同じくいかれ易いものでね。Sは酒好きだ。

自己愛と人間学とを結びつけること —— それは至難だけれどもっとも意義をもつ生き方である。一方は他方によって幾度も力強くよみがえってゆく。同質者と異質者の交流と反発 —— そこに生命の姿がある。

もし自己へのあつい愛情がなければ、いわゆる愛は精神をずたずたにするにすぎない。それは還元するということを知らない夢想的な人生に導く。それは「危機」というものだ。

愛すること……それが先決である。

いわば未来のない日常は、今の僕にとって、内面的準備（自己愛）に沈潜しうという能力が必要なのである。自分にあつくあれ！

三月一二日（日）⁴⁴⁾

中村さんの家でやるように（カーペット）をぶらさげるのもどうかと思った。戸のフスマは何といっても貧弱だから、ここにはいろいろものをおけたらいいと思う。

三月一二日（日）⁴⁵⁾

やはりSに結びつけて思う。お互いに前後してきずついて来たのだ。それはた易くはいやしえないものであろう。何故か、それは自己を維持しようとする深い egoism に対する否定であるから……それを忘れることはできよう。恐らくは仕事によって。……しかしそれはいつかよみがえってくるものであろう。……唯、それは progressive なものではないから結局は大きな過失として自他を恕さねばならない。それをいつまでも根にもってはいけない。それは愛情と思考をくらくするから……

三月一二日（日）⁴⁶⁾

Sがもし君の心をくらくするなら、力をつくしてSを愛すればいい。愛情が一切に打克つだろうから……しかしもはやSが君の心をくらくするほどでないなら、静かに自分の仕事に帰ればいい。

Sがもはや当分「愛する」ことをやめ、自分のことに一心になるといっているのは正しい。僕より少し先に進んでいるようで少ししゃくにさわる。しかし僕にはSよりももっているものがあるから、それで追越せばいいのだ。Sには一種の奇才があるから、時として所在を失うこともあるが、Sの本性を信じるしかほかない。人間の道から離れるのだったら、それはもはや関心のもちようもないわけだ。

結局天才と正常な能力の発展とを区別し、歴史の中で本当におし進めるものをつかみとる力——闘争力をつねに養わねばならない。民権とか文化とかいうものは、殊にそれが惑わすものであるから、よく評論せねばならない。

やはりこんなことばかり考えているのは少し妙だ。もう少し気楽にならねば！
弟へながくかかなかった手紙をかこう。

三月一三日（月）⁴⁷⁾

山田さんのもたもたも「どうも若さがなくなったのかな、わからん」という意見。

三月一四日（火）⁴⁸⁾

今井君とはマルキシズムの中のグナーデンの思想，[四字不明]を含む[二字不明]説についてはなしする。

三月一五日（水）⁴⁹⁾

Sへハガキ。19日カメラをもって哲さん方へゆくからよかったらあなたもきませんか——帰郷の金策，会社のことでてんてこまいしているということ。

三月一五日（水）⁵⁰⁾

一寸Sの手紙をまつ心がある。

Sへ——前略19日（日）午前中，中村さんのところへカメラをもってゆきます。よかったら貴女も来ませんか，今月末弟の見まいに一寸かえるつもりで少しの金策と今後のことでてんてこまいになっています。

三月一六日（木）⁵¹⁾

一たび愛することを知ったものは，常に愛するであろう……

三月一六日（木）⁵²⁾

江藤・かつま両君来る。21日4時加藤君にあうよう話する。

帰途長島君に会い，丸[一字不明]地で酒をのむ。かれとのむのは初めて。よわい三一才だということ初めて知る。一寸かたい感じがするが，そこが頼りになりそうなのはやはり人柄だろう。丸山氏より辻氏の方をかつているが，しかもわれわれ仲間と一寸逆。一体Tにしてもそうだが，かれらのタイプは何を基準にして生きているのだろうか。脱党ということも考えたとい

う。ハイラーテンの話，仕事のはなしなどで一寸しょってるところがあるのがおかしいけれど，店経営が苦しければ，そうなるのも当然だと思う。わるくすると立身出世にかかわるし……

三月一六日（木）⁵³⁾

国家理性と自己意識というものが争うように人間のめいめいの心の中にもたたかわれている。偽善かシニシズムへのてんらくが 20C の一般的特徴であるとすれば，それは悲しい現実である。スピノザ＝ゲーテの国家観が，カント＝ヘーゲル＝ビスマルク＝トレルチ＝哲学としてマキャベリと発展したのは明かであろうが。

三月一七日（金）⁵⁴⁾

鈴木が高垣に電話かけていたのをうけとる。一昨日夜中村さん方へ行った由，次の日「朝野島君がきていろいろ話したよ」という。一寸好ましい気がする。それに鈴木とは余り話してほしくないと思う。僕の側のエゴイズム，（というよりも，鈴木については近頃ケイハクと思っているからだ）

夜ハツネにゆき，[二字不明]，千代さんといろいろ話する。千代さんがSのことをいろいろ無邪気にきくので，僕も「嫌われたのさ」と返事する。「可愛想ね…（Sが）……」と千代さんは朗らかだ。仲のいい夫婦のよう……

三月一七日（金）⁵⁵⁾

Sと会っても恐らくかなり立入ったはなしはしなかったに決まっている。しかし，「いろいろ話した」といわれると，相手がSだけに一寸気にかかる。しかしそれは僕とSとのこと。鈴木 of 考えることでもないと思って，かえりに一寸鈴木のところへよりたかったがやめる。つまらないことだから。

唯SがNさんのところへあらわれたという消息をきいただけでも一寸僕は心をときめかせる。ずい分純心なものだと思う。19日に会いたいというハガキはまだ見ていない日だろう。

三月一九日（日）⁵⁶⁾

その後二人で広川の竹内氏（不在），夜中本寺——東府中とぶらぶら歩き，大國魂神社前でくずもちをくったり，花屋という花屋をのぞいたり，古道具屋に入ったりした。

そして女子寮に電話する。S123 から出てきたので写真を撮りあい，と中で別れる。「今日はゆこうかどうしようかと思ってしばしば考えたけど，朝寝坊したのでやめた」という。（2時す

ぎ)

別れ方がいつも以上にそっけないので一寸いつものようにケゲンに思う。N さん——「唯野島君がここに住んでるというだけみたいだね」と N さんらしい感じをもらす。トケイをとりにくるそうだ。

一ヶ月もあわなかったのに一寸ものたりないよう。

へやが小学校の教室みたいだということと、——それだけ他に人をよわせることができるというようなこと。

ちょっとかおをみて、「なんだこんな女に」といういじわるいような気持をもつ。

三月一九日（日）⁵⁷⁾

渋谷でお茶でものうかと思ったが、「そうね、[不明]よ」という。僕もそう思ったから、これも何気なく別れる。何だか妙なことが今日一日に二度あったよう。

三月一九日（日）⁵⁸⁾

アルプスに一寸より、ビールをちびちびのむ。

大分落着いたから、電気もひきそうという。今のところへやが殺風景（木の棚、机、ベッド）でいつも他人のへやに行行って遊んでいるという。

受付で電話してる途中一寸わくわくしたが、殆ど思いがけず、S の声が出た。S も大へんおどろいたように「あらまあ、あらまあ、来て下さったの……入れるの？（入れるのって？）それとも行きましょうか？（え！）じゃまってね」

ユニホームにハンドバッグをもってきたので一寸どこか歩いてかえるつもりだったらしいが結局 N さんがすぐ立上ったので、S といっしょに構内から別の出口（どっちから入るの……京王線？そうね）にすぐ歩くことになったらしいのだ。何となく本意ない別れ方になってしまった感じ。

電話してから、S がくるまでが一ばんたのしかった。

三月一九日（日）⁵⁹⁾

それと S のこと。何か気にさわったのかとも思うし、何でもなく仕事のことだったのだから

らとも思える。Nとわかれてもう少し歩けばよかった。それとも又……Sのあの電話の中の心からうれしそうな声との矛盾……僕の側にあのような天真なよろこびの気持があったなら……とも思う。しかしすべて反省材料たるのみ。

Sから時計修理代折半して¥250受取ったが、それから一寸気にかかる。めし代もかりたこと。又夜ね床の中で、Sにいつかいくらか借りたことなど思い出して一寸いやな気持。

三月一九日（日）⁶⁰⁾

「時計とりにゆくわ」……どうして時間や日のこと打合せしなかったのだろう。

三月二〇日（月）⁶¹⁾

この間Sが「橋川さんはいい人なの」「あうと、いろんなことしなければならないから……」といったそうだ。僕のところへくるこないはいわなかったらしい。

三月二一日（火）⁶²⁾

10時30分頃東府中にゆきSをよび出す。トケイを渡す。薄水色のハーフコートに紅い靴をはいてやってくる。おしゃべりしながら府中へ。大國魂神社で写真を取りあい、一昨日よった茶店の二階で汁粉をすすする。それから逆コースで東府中で別れる。金曜日にくるという。いつか一度P・Xに「不明」をよろうかと思ったが、かぎがないのでやめたという。Suga canという人のこと。割に健康な生活らしいのでいいと思う。「橋川さんも結婚しなさいよ」「今すれば家庭争議をおこすからね」「そうね」——

珍しく生き生きと和やかに話ができて幸福な感じ。少し小ぶとり（かおが）になり、よくみれば必ずしも美しくはないけれど、何か一つの生気があって、それがいいのだろう。髪のこと、靴のことではSuga canという人と僕の意見は全く一致しているようだ。あまり外には出ないで暮しているらしい。生活——仕事が単純でビジネスライクだから気をつかわないですむということ。それはいい。

明大前——渋谷——アルプス（2時前）

山田さんとアルプスで1時の約束がダメになり、わるかったと思う。丸山さんのところへ行ってるかと思ったが、来ていない。丸山さん、忙しいところ三〇分ほどおしゃべり。クニちゃん（二枚）丸山さん（一枚）三人（一枚）取る。「ニーチェ」、「マルクス」のはなし。Sのことよくみているので感動。

三月二一日（火）⁶³⁾

小母さんと一枚とる。これでおしまい。歩いてかえる。

三月二一日（火）⁶⁴⁾

一寸Sの別れ方はやはり何でもない——

「そういう欠点を直そうという意志があるかどうかということよ…」（鈴木のことについて）

三月二一日（火）⁶⁵⁾

違反のおわびにゆく。

三月二一日（火）⁶⁶⁾

僕がかわるだろうということ。つよくおちついてくるだろうということ。二人がいていたのが嬉しい。

山田さんには一寸つらく当たったかと思うが、ひどいことだろうから…（それが丸山氏の、S、山田さんたちに「不明」。歩いて渋谷へかえる。

三月二二日（水）⁶⁷⁾

夕方昨日の写真とってかえる。殊によく出来ている。Sのがいい。

三月二三日（木）⁶⁸⁾

明日Sがくるだろうかと半ばたのしみ、半ば不安。僕と同じ気持なら来る筈。

三月二四日（金）⁶⁹⁾

Sが来ている。今日は地みな黒のオーバーに黒の靴、緑色のスーツを身にまとっている。WやMがわいわいといろいろ話している。

Sが食事の後、散歩に出かける。日比谷公園、宮城前をぶらぶら歩く。「今日はどうするの……」「夕方から一高の記念祭にゆくんだよ」

——5時に学校の校長にあうとのこと。実験費、授業料を納めなければならないとのこと。学校はやめてKOの経済の通信教授をうけるとのこと。（夜古賀にあってきいたら、ラクダイしたんだそうだ）

天気もよかったし、ぶらぶら話しながら初恋の頃のように朗かで清純な気持——一度道をよこぎるのに手を握ったが一寸こうふんする。ローラースケートのところで「君はひっくりかえったり、おっこちたりするようなことが好きなのね」

—— 日劇地下のアルビオンの別室でお茶をのむ。

「Mam の「不明」さんから手紙来ているらしいわ —— あの人少し頭がバカなのよ」「そんな人好きになったりして」「……好きじゃないわ。唯味があって面白かったのよ」

僕いろいろ S の服装ことなど話しする。S はそういうことをかまってもらうのが好きらしい。「あたしちゃんとしたものをかう前に、つまんないものをかうくせがあるの」それはたしかにそうだ。人は甘やかせないから、自分で一寸甘えているわけだ。どんなリコーな女の子でも頭の奥のところで赤いくつや藤色のセーターや太りかげんのことを一生けんめい考えているものらしい。

僕のほんやくの話、ロブソンの本タイプで打ってあげましょうかという。とても大へんだし、一ページ幾らで終えるみこみがなかったらおねがいするという。ひるまひまだし、勉強にもなるからという。いろいろおちついてきたら、留学というようなことも今は考えなくなったらしい。会話なども一年位しなけりゃダメと妙にしおらしいことばかりいう。

「赤いくつ月曜日に見ましようか」と初めて S の方からいい出して、「朝早いからならんだよ」などといってそのままになり、別れぎわに僕の方から「いや日曜日にくる？」といったら「そうね…」と一寸しぶる。「早いから…ね」と折れ「いやかえってからにしよう」とあきらめる。「早いのはいいのよ」といいながら、何となくちぐはぐな気持。そういうことが一度は必ずある。

友と考えてもっと最上級の compliment をのべておけばよいということかな。

写真みなもってゆく。アルバムにするんだそう。「もっと大うつしにすればよかったね」「ちゃんと髪をのばしてからよ」——「坊主にして撮影するのかと思った」「そのつもりはないのよ」

丸山さんに一度あうようすすめる。「聴講にゆくわ」といっている。医学の方は別として経済や社会のことをやりたい気持になっているのがわかる。

「あれからみないろいろなことって困ったわ……」「どうして」「みなひまだから何かおこると大さわぎするのよ……」

どんなことをいっているのかとうとう聞かなかったのがおしい。

三月二七日（月）⁷⁰⁾

S に何かかってやらねばいけない。

朝 S に手紙、金（三一）土（一）はいづれかに会いたいから返事よこせとかいてやる。

三月二七日（月）⁷¹⁾

Sへの熱少しさめる。バカバカしい。お前一人でやればいいし、第一少しサンマンで教養がない。素質はいいが、かまってるわけにゆかない。

三月二八日（火）⁷²⁾

中村氏のいやなところは、何をたのしみに、何をその時に行いたいのか、いつも個人をいわずはっきりしないことだ。心づかいというものが成立たぬ。底ぬけの Lazy Time をおつきあいさせられるわけだ。

野村という人も何だかハッキリしない田舎ボケしたように思われる。それが面白いのだろう。

三月二九日（水）⁷³⁾

Sとしても僕としても

三月二九日（水）⁷⁴⁾

大抵Sに結びつけて思う。結局Sに対するさんまんな関心が抜けないでいるのだが、考えてみると女性一般へのかなりうぶな好奇心のようなものといってもいいだろう。Sのかわりに誰かやさしいひとがいれば、それでもう忘れているだろうと思うのだが、一寸みまわしたところそういう人は見当たらない。時に冬子さんや洋子さんのことを考える。静子というひといい人だったと思う。唯やさしいものに一寸いかれているので、ハカないくらいの淡いものを考える。肉体的なこともあるが、それはそれほどつよくはない。

Sについてはかなり強く実験的になっているが、その欠点や、未完のようで、愛してみたい気持もかなりつよい。とすれば他に女性を求めることが不可能という妙なケツロンになるのだが、そう思うのはやはり一種の衝動のようなものなのだろう。

今日かえりに渋谷¥1,000 作る。ズキンを一昨日かったとこで一寸バツのわるい思いをする。向こうがアヤまっているのを僕はだまってみている。妙な人間だと思う。貧——Triebに注意せねばならぬ。

三月三〇日（木）⁷⁵⁾

Sより電話ありし由。

三月三一日（金）⁷⁶⁾

早く起き、有楽町前にて、Sと会う。「赤い靴」みる。

Sはかなり感動したらしい。なんだかいらいらしているようで、「僕がいなけりゃ泣いた」とか「お母さんや橋川さんが死んだというより悲しいわ」とかいう。お茶のみたいというのに「かえる」というので、僕は朝からSのねぼけたままのかおがおかしいので、わらいながらいや駅まで送ろうと有楽町にゆく。途中汁粉を食べている中気がかわったらしく、「丸山さんにあいたい」といい出したので、理由をきこうとしていると、「一緒にゆかない？」といい出す。2時半ということで、会議に出る。4時になる。Sはまっていた。それから大学にゆき丸山さんのところへ。Topでいろいろ話する。「丸山さんははっきりしていて話しやすい」という。池袋駅で丸山さんと別れ、又銀座に出る。7時頃までサエグサでまたせる。それからスナックバーにゆきハイボールをのみ、市恵さんのところへ行ってみましょうというので、夜の町をのぞいて歩いてゆく。はじめはその夜の中かえるつもりだったらしいが、「泊るところがあれば」というので、「市恵のところに泊れるよ」という。千代さんところでビールのみ、9時すぎに市恵がかえってくる。四人で少しのみ、Sは先に二カイでねる。はじめ市恵と二人でねていろいろ話していたが、かれきをきかしてひとりで二階から降りてくれる。いろいろSのやり口にフマンのような気持をいだいてねる。

朝7時頃、めがさめる。

四月一日（土）⁷⁷⁾

Sの気がわからぬので、そのまま休み、朝一寸のぞいてみる。おき上がっている。それから僕は又ねる。Sの奴先にかえるかと思っているとかえらなかった。いろいろSと話す。

「だんだんきらいになる」という。どうして？ときくと、「しつこいから」という。どういうことかわからぬ。それから「手紙はほしいけどあまり来ていただきたくないの」という。「家へかえったら結婚をすすめられるでしょうね」と一寸センチにきく。「まだ気はかわらないの」「かわらないね」

要するにやはり僕のその後の変化についてわからぬらしい。その点リカイ力がないといって攻めきする。そして結婚ということを僕がいやに急いでいるように思っているらしい。「私はあせっているわ」ということを説明する。Sは結婚やレンアイについての考えもかわったという。しかしそれはかわったように思えない。やはり楽しく生きたいということらしい。Sがフロから出て、朝食を一緒にとり、前よりは少し和む。また話する。

一方よくわからぬが、「僕が僕でなくなれということ」「まあそうね」——「例のように重たい」とか、「結婚生活ができそうにない」とかいう。それは僕としても「yesがあっても今のままで生活できるとは思わない」と説明する。

雨がふっている。珍しくSが僕の恐れる決断をハッキリしない。のんびり話している。

電車で銀座に出て、サエグサでコーヒーをのむ。

僕は当分君しか愛しないし、愛しているというかぎり僕の方が絶対につよい気があるんだよ——だから君が招待して来なくなつてそれは本当に何にも思わない。（今度の招待のこと昨年の時のように考えているので……）

昨日だって君が来なけりゃ日曜日でもカメラをもってぶらぶら行こうか思っていたんだよ……その点僕の方に君にそう思わせるものがあつたから、それにしても少しは君の内がわにヒガミがあると思うね。——前にかいた「愛せよ黙して汝の欲するところをなせ」というのが原則な人だ。僕にもいろいろ仕事が決まっていること。恋愛ということに殊に神経をつかいたいとは思わない。

……一度ハッキリいったことを何度もくりかえしたくはない人だ。それは男らしくないところがあつたかもしれないが、それが短所で長所な人だからそうして生きていくより仕方がない。Sはめをふせるようにしてきいていた。

「そんな風に考えるのはやめるわ。」その点は二度もいっていたからよくわかつたようだ。「一度手紙と何かを送ろう。」それからもう一寸考えこむようにSは黙っていた。

本をよめとということ。以前の例をひいて話した。

「僕は丸山さんの次には君のとくいなことをとてもよくきいている人だよ——そりゃプライドはあるが、（これはSがシテキした）それはやはり気にしても君の側にもひがみがある…」

「あたし余り下らないいやみいわれて、叩かれて、何かとつまらないと思っていたの——」

「送ってゆこう——」「いいわよ」「僕は送る人だからいいじゃないか」二人で笑う。有楽町の駅で別れる。「じゃ又ね！」とS。

夜カメラとどけてかえる。ねむい。

雑誌よんでると鈴木がくる。昨日夜、今朝と二度きたそうだ。前の焼酎のんでわかる。

四月二日（日）⁷⁸⁾

Sのこと思い出す。

「君はね、人を好きだということをハッキリいう人だったが、今「キライ」ということをハッキリいう人になつたね。キライということは何もいう必要はないんだ」

「かるく生きてゆきたい、という。かなりつねにむづかしいことだ。日本人はみんな重苦しい歴史の中で生きてきた。精神の平和——ということ。」

スピノザ、ゲーテ、結局のところ、そういう風になるためには……

そして三十すぎて、やはり精神と肉体の苦しみをへた人と一緒になりたい。

——Sもそれがいいわといっていた。「若い人は好きになれば一寸考えてみると大へんなよう

で恐しい」人生には善意を以て……

これも S と殆ど同じ。

今の若い人達……女の人達は「生活知」の面はスマートで早く成長する。しかし、それでのびるだろうか。さらに教養が必要ということ。

「アイサツ抜きで話できる人になって…」ということ。それはいいことだと思う。唯僕の側には愛がつよくある。

めいめいのデーモンを知ったこと。それに対する断念ということ。積極的な断念のはなし。つよく生きよ！

キライなどといって 24 時間以上も一しょにいたのか。それにいろいろなハナシをしてキライといったのは一番はじめだから —— それからよくはなししていないから —— それはあまり気にすることはない。

「仕事は何でもいいの —— 学者の奥さんになりたいわ……」

小さな物欲のはなし。

めいめいの職業と結婚生活のこと。

自分だけのたのしみのフィクションでなくて、みんなのたのしみになるフィクション。

はじめジープで荷物運んだりしたので、S は寮にはタイクツしたらしい。大した人いないといっていた。

鈴木方不在→渋谷にて金づくりフィルムかう→池田方→荒川方→池田方→帰宅→社→帰宅。

それは考えないことにするわ……。そうだよ。都合がわるかったり何かで来られなくても当たり前だし何も気にすることはない。唯僕は君を愛しているし、愛さなくなれば別だけれど、愛している以上僕の方がつよいんだよ。「愛せよ黙して汝の欲するところをなせ」が原則だから……わかったわ、そのかわり約束したら時間はちゃんと守ることという。それでいいんだ。去年の時は、僕は当然怒ってもよかったんだ……そう考えれば何とも思わない……

僕は結局君のことあきらめているから。あまり気にすることないさ…運命というのがあるのね（運命ということ、S は何と思っているのだろうか？）

僕があきらめるといっても愛することはやめない。僕が初めて愛した人は、僕の生涯を支配するだろう。

「愛するって苦しいわ……」とSはいう。僕もそう思う。Sは愛の苦しみをたしかに体験したからそれだけ断念や愛への拒否がはっきりしてきている。僕もそうなるだろう。愛情が負担でなくなるようなそういう人間同士の愛を思うようになるだろう。

だから愛において、報いを考えてはいけない。黙して与えよ——黙して汝の道をゆけという賢者のことばが、初めて生きてくる。時として、愛を口走りたくなる。しかし、何度もそれをいうべきではない。ことにSにとって、愛ということばが、禁句である場合がある。Sの気分、気持を考えてそれはいわれねばならない。

生涯をつらぬいて、Sを愛すること、そのようになったら、必ず道はひらけるだろう。

四月三日（月）⁷⁹⁾

女性への愛は軽快な生き方を要求する。生命そのもののように、めに見えぬほどデリケートで透明なほのぼののりんかく。

四月八日（土）⁸⁰⁾

晴天になる。

1時Sに化粧箱と手紙と28日の映画の招待券を送る。¥2,000初めて郵便貯金にする。

手紙

（略）

貴女への愛は大へん苦しかったけれどもうおしまい。

貴女にあわなかったくろうするのもし必要がないから完了。

今度あう時は他人として会いましょう。

貴女の僕に与えたもの。ロマン・ロラン、スピノザ、ゲーテ、アリストテレス——フィロソフィア。

貴女の愛にも、知力にも、行動にも限界があり、人類はギリシャ以来、その限界との戦いの中で育ってきました。人類の発展、無限の（ト・アペイロン）世界がひらけることを、少しも疑うことができない宿命にあるかのように…。

僕はそれを疑わず、そのように〔五字不明〕できることは、アリストテレス、スピノザ、ゲー

テの名においてということだと思います。

この前かいた以前の手紙も貴女のものですが、貴女へのお願いですが、全て焼きすてて頂きたいこと。

めいめいがめいめいであり、個が普遍であるように、S・Nが愛情深くあるように。

愛するものへ

貴女と別れて、僕は僕自身のレーベン——九冊のノートの形をとって僕の魂をみつめています。貴女への限らないシュトライト。貴女を愛する人間は何故決してむくわれないのでありましょう。——むろん貴女を始めて愛した僕は楽観主義を否定する。あとは違いたいみで、愛情の不滅と永遠を信じます。

貴女を失って、僕は太へんコドクですが、それとともに、美しい別れになることを予感して、いつかまた、そのために生命をすててもいいと思っています。

本当にその通りになろう……。

どういう心理か知らない。弟のこと、数日前の放蕩のこと、元気が伴わないこと、帰郷のこと、新しい生活のこと、色々な人の好意のこと、昨日読んだロマン・ロラン、エンペドクレスのこと、その他～

そして今僕は完全にSを脱却できたように思う。招待券のこと、手紙全体のことをSがどうか、わからない。しかしそれは今日どうでもいいことだ。僕は愛することを今新しく始める。

3 ノート *Gedanke u Reflexion* (10) April 10, 一九五〇 June15, 一九五〇⁸¹⁾

一九五〇年四月一〇日から六月一日までの日記である。大学ノートを使用し、表紙のタイトル部分に「*Gedanke u Reflexion* (10)」と横書きで書かれている。また表紙の中央部分に二行に分けて「April 10」, 「June15」と書かれており、(10)は赤鉛筆、June15は青鉛筆で書かれている。本文はノートを横向きにし、青インクの万年筆又はボールペンを用いて縦書きで書かれている。

四月一日 (火)⁸²⁾

何か心の深くで求められているものがある。Sへの断念とその愛の転換の運動が僕らの日常を支配している。愛したいのだ——しかもSへのようにそれが一方の不毛におわるのではなく、お互いに愛したいという欲求のようである。しかし、お互いに愛するということがいつも成り立つかどうか。つねに、一方的に愛するに終るのではないかという不安と、それにもかかわら

ず愛したいという衝動……。

フィロソフィア

哲学者のように愛するほかはないのであろうか。魂と肉体の夫々の機会とからみあいを、最もデリケートな逆光でとらえる力、そしてその中で持続するものを見失わないような愛情！……今のリカイも別れということが良いとすれば、世界のハルモニアをついにはうたがうに到る。

四月一日（火）⁸³⁾

Sへの愛が僕に教えたことのもっとも偉大なことがらの一つ。——自尊心というもの。

四月一日（火）⁸⁴⁾

僕のSへの愛には知的な vanity がなくはないのだ。それが永遠なるべき愛情を世俗のハカないものにして下う。

四月一日（火）⁸⁵⁾

朝¥2,500 預金。Sにハガキ。

Sにはやっと出発のメドがついたこと、かえるの一寸たのしみのような気持、講師の収入＋失業ホケンでくらすということ、それも一寸たのしみのようなこと。

四月二日（水）⁸⁶⁾

ことにSのことが魂をしめらせる。それが肉体的な衝動と結びついているのでいつも困る。Sが誰かに身体を許すというようなことを考えるとしめっぽくなる。多くの女たちの一人だと思えばいいのだがなかなかそういう風になれない。尤も一頃に比べればかなり思いきりはよくなったが、そのかわり心の中でやさしい愛情を求める気持がつよくなっている、それがともすれば惰性的にSの方に向う。どうにかしてテンカンせねばならないが、誰でもいいというわけにゆかない。単純な性的な kind ならば処理するのはカンタンだと思うが、つねにその人の動きや匂いや髪や目の動きを身近に感じていたいという気持はそれとは別だから困る。

四月五日（土）⁸⁷⁾

Sへの思慕……

四月七日（月）⁸⁸⁾

僕はそっと心の中でつぶやいてみる「Sよ……」

五月三日（水）⁸⁹⁾

「あんなに感情的にならなくてもいいのに……」とNもいうほどいらいらして僕のこともいろいろ云ったらしい。いいといっても送ってくるとか、行きたくないのに切符を送って来て、その切符の処分に困ってやって来たとか、どうもSらしくない拘泥の仕方である。もう一切手紙など出すまいと思う。そんな風につきあっても、今のところいらいらするのはS自身の理由によるものであるから、僕までまきぞえをくうのはごめんだ。なおSを愛しているようにも思うがあんなにヒステリックなタイドをフッカケられると、だんだん処置なしになって、どうでもいいという気にもなる。

僕の側の愛情があつから、僕にはなんでもないことまでSにはこたえるのかも知れないが、それにしてはこの前、四月一日にも、二十八日も少しどうかと思われるくらい普通よりも感情的になっている。「もう愛することやめる。気にするな」という風にかいたのは、ものほしげでそれがSにぐっと来るのかも知れないが、——それは僕のことであって、Sはそれをもし「あ、そう」と思っていればいいのじゃないか。

生活力と一種の独立心はみとめるが、要するに性格的にひがみをもっていると思う。それは結局かの女の知力の狭溢から来ると思う。

五月三日（水）⁹⁰⁾

帰宅して又ずっとSのことで気をつかうのはいやだと思う。僕自身がはっきり決めなければならない。——手紙その他一切や^メメルこと。Sは他人であり、何ら僕と特殊な交渉を持たないことをはっきりする。それには交際範囲でもハッキリさせねばならない。

女性のわけのわからぬ愛から去れ！ 実際女という奴は手前勝手なものである。僕の中に僕自身の^アヤ^マチに対する反抗心、復讐心がわく。

4・8手紙をかいてから帰郷前にハガキ一枚、広島からハガキ一枚、帰宅後ハガキ一枚かいている。もう決して書いては^メぬ。

五月三日（水）⁹¹⁾

お前の魂が凍ろうともそれはそれで致し方ない。

五月四日（木）⁹²⁾

朝Sより手紙。絶交しましょうというわけ。それもやはり二十八日のことが動機になっている。そうでないといっつかいているが、それならそれまで通りにしてればいいわけ。いろいろ理由をつけてるが、要するに拘泥からぬけきれぬわけ。僕はハガキを自然でごくふつうにかい

たつもりだが、それが小細工にみえるらしい。それは僕の側にも責があるが、何か直接にSの中にもあるらしい。返事をかきかけたが、やはりいみないと思うのでやめる。手紙もやいてすてた。

五月四日（木）⁹³⁾

一日中Sのこと考えていたが、何にもなるわけがない。手紙をかいたものかどうか迷う。Sの処置は必ずしも正しくないから、文通は今までどおりにしていいと思う。今までだってSが来たくなければ来なければいいので、かわったことはないと思う。何かそこにSのサイギ心かヒガミがあるように思う。少しヒステリーじみていると思う。

「小さな愛情ではなくて大きな愛情」とか「愛されていると自分というものがわからない」とか、もっともらしいことをいっているけれど、少しくどいという感じがする。

五月六日（土）⁹⁴⁾

荒川とSのこと一寸話する。やはりS少し妙だという感じもったらしい。

五月六日（土）⁹⁵⁾

Sのこと、返事かけぬ。僕のこと……

五月六日（土）⁹⁶⁾

Sのこと、割に朗か。

五月六日（土）⁹⁷⁾

Sに一寸手紙かきたい気がするが、やめた方がいいだろう。一つここははっきりさせるべきだし……こんな文案！

文案

お手紙拝見しました。いろいろゆっくり考えてみましたがいつも同じことのようにですから申しつけておきます。すべて貴女の厚い好意だと思い、心から有難く思います。僕の気持はいつか4・8の手紙で申上げたように「不明」かいたように思います。貴女もお大事に。貴方の「不明」嬉しく思います。今は弟のことと、新しい仕事をするので一杯です。

Sはどこか僕に似て来た。丁度裏はらのところで憎んでいる感じ。

理解力——知識の欠如。

僕は愛する側だから、ゆとりをもっていた。かの女は愛されるものの不安をぎりぎりに憎んだと思う。

僕と考えていることが全く同じ。そしてかの女はそれに気づきはしない。わかれるということは自由と違うものにとっている。かの女の感性的理解——

五月一九日（金）⁹⁸⁾

しょっちゅうSのことを考えていたようでもあり、別のことに集中していたようでもある。Sのことはもはや心を煩わさない。僕にはやはり僕という明らかなものがあり、その中から僕と全体とのつながりができてくるので、唯正義でなければならぬ、虚飾があってはならぬということをしみじみと思い、決心して帰ってきた。Sに返事を三度ばかりかこうと思ったことがあったが、それはやめてよかったと思う。

今Sという人を考えてみると、僕がなお深く愛し尊敬していることはわからない。その断絶の手紙は僕の小細工だったとみとめる。(Sのために思ったにしろ)

Sその人はといえば、知識は必ずしも深くない普通の少女である。それがかの女の意識しない誇張とヒステリーとなってあらわれる。女性としては順良さが欠けているが、それは時間の問題と思う。

五月二一日（日）¹⁰⁰⁾

朝ふと思い出したようにSに返信をかけた。タイプ用紙6枚、エア・メールの封筒に16日まって出した。

近況とSの手紙少しヒステリーだと思う。自己のマニアをのばすのではなく、客観的に正しくありたいとねがうべきだ。自己の悩みを女性一般の下らなさの中に解消するのではなく、逆に解決すべきだ。より感情が朗らかに、理性が明晰になったといえるかどうか？自由幸福といっても他人にはいわしの頭である。

仕事のこと、根本的に考えたらいい。今の仕事感心しない。

僕は絶交には反対でナンセンスだと思う。だから手紙はかくし返事がほしい。別に会いたいとは思わない。タイプのコピーを作ってもらいたい。別に気にしてないし、いそぎはしないが、とにかくゆっくり考えて返事を下さい。

その手紙かいて祐天寺で今井君と一緒に投函したが、何か一つ仕事をすませた感じ。一日一善というけれど、それは当面の義務をよく考えて一つでもやること、仕事ということにもなる。そしてその結果については思い煩ってはならない。次の仕事があるからだ。仕事は重要さの順序に無限にあるのだから。

Sのことでいうが、愛とは唯まつだけで愛であり、僕はもし君と恋愛できるならしてもいいと思う。Sには従って今日の手紙が最後の手紙になるかも知れない。それは希ましくないし、正しくない。希望をもってまつこと。これが僕のこの問題についての善であると信じる。

Sへの手紙がすっかりかわったこと。月初め頃の日記をみてもハッキリわかる。どうしてそうなったのか知らない。弟のことと二回の帰郷と、仕事の好転とが要因だろうと思う。めそめそしたところがなくなったのはたしかだ。それとFという小さな援兵！

それと根本的には自分の足で立つ、立てるという自信。キルケゴールの倫理。実存ということ。自己を問うこと。自己を煩わすことへの勇氣。そんなものが基調である。自己と対立するものにぶつかっても恐れないということ！改めてお返事とかかないでよかったと思う。それでは唯別れてしまうだけで後のためにもよくない。僕はこのことでは、哀しいと思うことをやめてやれたのだ。忍耐ということ——それは現実がいかに大切であるかということ。それよりも一つ一つの義務に勇氣をもって当ること。それが人をつよくする。

六月三日（土）¹⁰¹⁾

そして話せないくらい大へんな苦しみはSの過去にあったのだらうと思う。

六月三日（土）¹⁰²⁾

Sが僕のことを一生の崇高な思い出とはしないとかいていること——それが気になる。愛ならば、それは崇高ではなく、かの女の存在の不在にむずびつくはずのものなのだ。かの女は愛さなかったのだらうかと思う。

Sへのサイゴの手紙に、僕の心理が返事にあらわれていただろうか？レトリックがSを害さなかったらうか？虚飾！

六月三日（土）¹⁰³⁾

「いらっしゃると可愛想な気がするわ……」

「どういう意味？」

六月三日（土）¹⁰⁴⁾

浮気するのだそうだ。そのことしきりにしている。今日は僕が昔の僕のようにみえるという。

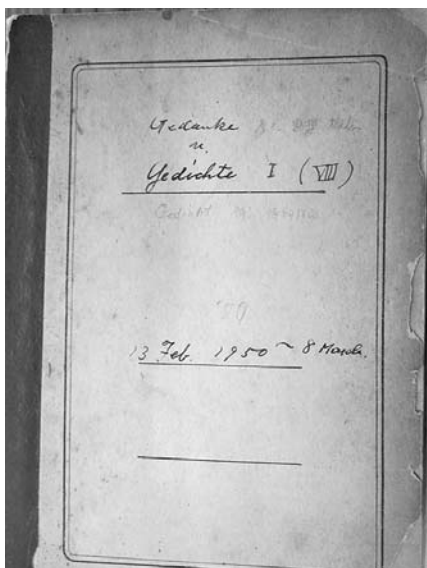
先日は「三字不明」らしい。

六月一五日 (木)¹⁰⁵⁾

考えても仕方ないと思うが、やはりSのことを気にかけている。一度会って話したいと思う。悪く思ったりするが、やはり会いたい。僕には不和の理由がわからないのだ。仲のいい兄妹くらいには交際できると思う——反対にそれだけに無用のことのようにも思われる。しゃくにさわるだけのことと思う。少女の感情を気にしていても仕方がないとも思う。しかし何か胸の底に空洞があるような気持がするのだ。

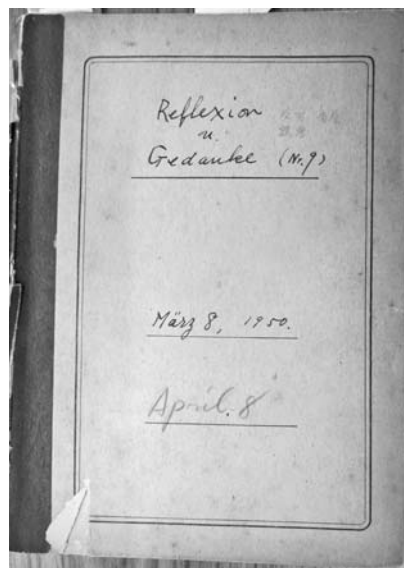
本稿は、人文研での共同研究の参加経験などがない方からの投稿原稿であるが、編集委員会での審議にて研究所の研究と強い関連性があるとして投稿が認められ、かつ、査読を経て研究所の紀要上で公開するにふさわしい内容と判断されたため、掲載するものである。

編集委員



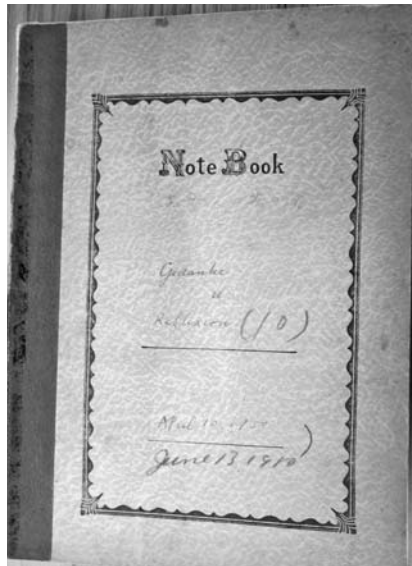
画像提供：慶應義塾福澤研究センター

【図版1】「慶應義塾福澤研究センター蔵・橋川文三関係資料目録」13-9-42 一般文書(ノート), *Gedanke und Gedichte I (VII)* 13, Feb, 1950~8 March 表紙



画像提供：慶應義塾福澤研究センター

【図版2】「慶應義塾福澤研究センター蔵・橋川文三関係資料目録」13-9-41 一般文書(ノート), *Reflexion und Gedanke (Nr. 9)* März 8, 1950- April 8 表紙



画像提供：慶應義塾福沢研究センター

【図版 3】「慶應義塾福沢研究センター蔵・橋川文三関係資料目録」13-9-43 一般文書（ノート）, *Gedanke und Reflexion* (Nr. 10) April 10, 1950– June 13, 1950 表紙

注

- 1) 慶應義塾福沢研究センター「橋川文庫」は、慶應義塾福沢研究センター編集・発行『橋川文三氏旧蔵書籍目録（通称 橋川文庫）』（一九九七年）によれば、生前の橋川と研究上の交流があった元同センター所長の内山秀夫教授の企画立案によって、橋川没後の旧蔵書籍を同センターが一括して引き受け整理し、同センターにおける昭和研究会の中核となることを期待して創設・公開された個人文庫である。同センターは、主に「福沢諭吉の思想・業績に関する研究」や「福沢諭吉・慶應義塾関係資料の収集・整理・保管・展示」等を目的に設置されており、研究活動や教育活動を行っている。同センターの「近代日本研究資料」として位置づけられている「橋川文庫」には、橋川の旧蔵書籍以外に、橋川の日記、ノート、原稿、書簡、写真、カセットテープ等の一次資料が所蔵されており、神奈川県港北区日吉町の慶應義塾大学デジタルメディアコンテンツ研究統合センター内閉架書庫で保存されている。慶應義塾福沢研究センターから御提供いただいた「橋川文庫」の旧蔵書籍目録、資料目録によれば、「橋川文庫」に収蔵されている旧蔵書籍は合計四一八冊、日記は合計四一冊である。日記の年代ごとの内訳は、一九五〇年代の日記が一九冊、六〇年代の日記が九冊、七〇年代の日記が七冊であり、他に一九四九年の日記が四冊、一九四九年から五〇年にかけての日記が一冊、一九七八年から八一年にかけての日記が一冊保存されている。なお、旧蔵書籍は慶應義塾大学デジタルメディアコンテンツ研究統合センター内閉架書庫に保管され、日記等は同閉架書庫内の保存箱に収納されている。本資料は橋川日記の一部を紹介するものであり、他の日記の解説・翻刻については今後の研究課題としたい。本稿は、橋川の旧蔵

書籍等の資料を数多く受け入れ整理し、長期間保管されてきた慶応義塾福沢研究センターの研究支援によって実現し得たものであり、慶応義塾福沢研究センターに対し衷心より感謝を申し上げる。

- 2) 「慶應義塾福沢研究センター蔵・橋川文三関係資料目録」13-9-42 一般文書（ノート）, Gedanke und Gedichte I（Ⅷ）13, Feb, 1950～8 March
- 3) 橋川, 一九八九, 四二頁上段二行目と三行目との間に入る文章。以下「との間に入る文章」を省略し, 「○行目／○行目」などと略記する。
- 4) 橋川, 同前, 同頁上段六行目／七行目。
- 5) 橋川, 同前, 同頁上段一二行目／一三行目。
- 6) 橋川, 同前, 四四頁下段四行目／五行目。
- 7) 橋川, 同前, 同頁下段一六行目「…人間一般にそれはあると思う。」／「それは人間の一ゾク性であるかも知れぬ。」。
- 8) 橋川, 同前, 四六頁上段二二行目／二三行目。
- 9) 橋川, 同前, 同頁下段三行目／四行目。
- 10) 橋川, 同前, 同頁下段一一行目／一二行目。
- 11) 橋川, 同前, 同頁下段一二行目／一三行目。
- 12) 橋川, 同前, 同頁下段一五行目／一六行目。
- 13) 橋川, 同前, 四九頁下段八行目／九行目。
- 14) 橋川, 同前, 五〇頁上段五行目／六行目。
- 15) 橋川, 同前, 同頁上段一五行目／一六行目。
- 16) 橋川, 同前, 同頁上段一九行目「一旦帰宅,」／「昨日長義とはなした…」。
- 17) 橋川, 同前, 同頁下段三行目／四行目。
- 18) 橋川, 同前, 同頁下段七行目／八行目。
- 19) 橋川, 同前, 同頁下段八行目／九行目。
- 20) 橋川, 同前, 五一頁下段九行目／一〇行目。
- 21) 橋川, 同前, 同頁下段一八行目／一九行目。
- 22) 橋川, 同前, 同頁下段二一行目／二二行目。
- 23) 橋川, 同前, 同頁下段二二行目／二三行目。
- 24) 橋川, 同前, 五二頁上段六行目／七行目。
- 25) 橋川, 同前, 五三頁上段一六行目／一七行目。
- 26) 橋川, 同前, 五三頁下段七行目／八行目。
- 27) 橋川, 同前, 五三頁下段一七行目／一八行目。
- 28) 橋川, 同前, 五四頁下段二一行目／二二行目。
- 29) 橋川, 同前, 五四頁下段二二行目「朝鈴木来る。」の前に入る文章。
- 30) 橋川, 同前, 五五頁上段五行目／六行目。
- 31) 橋川, 同前, 同頁上段一〇行目「鈴木 of 奴この頃考えてみると可哀想だ。」の次に入る文章。
- 32) 橋川, 同前, 同頁下段一二行目／一三行目。
- 33) 橋川, 同前, 五六頁上段三行目／四行目。
- 34) 橋川, 同前, 同頁上段八行目／九行目。
- 35) 橋川, 同前, 同頁上段一三行目／一四行目。
- 36) 「慶應義塾福沢研究センター蔵・橋川文三関係資料目録」13-9-41 一般文書（ノート）, Refle-

xion und Gedanke (Nr. 9) März 8, 1950- April 8

- 37) 橋川, 一九八九, 五六頁上段二〇行目「…この点一寸現実にきくと感じることもある。」の次に入る文章。
- 38) 橋川, 同前, 同頁上段二二行目「…中村氏に久しぶりに会い, 一寸話する。」の次に入る文章。
- 39) 橋川, 同前, 同頁下段一七行目「…かえりにアルプスの小母さんに一杯ねだって（たしかに少々甘たれてる）かえる。」の次に入る文章。
- 40) 橋川, 同前, 同頁下段一九行目「帰途どうにも妙な気持ちで古賀のいていた広島屋という処へ行ってみる。」の前に入る文章。
- 41) 橋川, 同前, 五七頁上段一行目／二行目。
- 42) 橋川, 同前, 同頁上段二行目／三行目。
- 43) 橋川, 同前, 同頁上段九行目／一〇行目。
- 44) 橋川, 同前, 同頁上段二〇行目／二一行目。
- 45) 橋川, 同前, 同頁下段一一行目／一二行目。
- 46) 橋川, 同前, 同頁下段一四行目／一五行目。
- 47) 橋川, 同前, 五八頁上段一八行目「…と否定的,」／「グループ加入については…」。
- 48) 橋川, 同前, 五九頁上段二一行目／二二行目。
- 49) 橋川, 同前, 同頁下段一九行目／二〇行目。
- 50) 橋川, 同前, 六〇頁上段五行目／六行目。
- 51) 橋川, 同前, 同頁上段一五行目／一六行目。
- 52) 橋川, 同前, 同頁上段一六行目／一七行目。
- 53) 橋川, 同前, 同頁上段一八行目／一九行目。
- 54) 橋川, 同前, 同頁下段一八行目／一九行目。
- 55) 橋川, 同前, 六一頁上段一行目の前に入る文章。
- 56) 橋川, 同前, 六二頁上段四行目／五行目。
- 57) 橋川, 同前, 同頁上段七行目「…やはり女の心はと思う。」／「やはり明大前にいるとのこと。」。
- 58) 橋川, 同前, 同頁上段一一行目／一二行目。
- 59) 橋川, 同前, 同頁下段一行目／二行目。
- 60) 橋川, 同前, 同頁下段二行目／三行目。
- 61) 橋川, 同前, 同頁下段九行目／一〇行目。
- 62) 橋川, 同前, 同頁下段一一行目／一二行目。
- 63) 橋川, 同前, 同頁下段一二行目「…今井夫婦不在。」／「歩いてかえる。」。
- 64) 橋川, 同前, 同頁下段一二行目「歩いてかえる。」／「夜瀧谷で本うり, …」。
- 65) 橋川, 同前, 同頁下段一三行目「夕食後山田さん方へ,」／「山本氏（？）という…」。
- 66) 橋川, 同前, 同頁下段一四行目「…十一時までダベル。」／「歩いてシブヤへ, かえる, すぐねる。」。
- 67) 橋川, 同前, 同頁下段一九行目／二〇行目。
- 68) 橋川, 同前, 六三頁上段二行目／三行目。
- 69) 橋川, 同前, 同頁上段四行目／五行目。
- 70) 橋川, 同前, 同頁下段一九行目／二〇行目。
- 71) 橋川, 同前, 同頁下段二一行目／二二行目。
- 72) 橋川, 同前, 六四頁上段三行目／四行目。

- 73) 橋川, 同前, 同頁上段五行目「この数週間殆どヒマとっていい。」/「考えねばならぬ多くのことがあるが…」。
- 74) 橋川, 同前, 同頁上段一二行目/一三行目。
- 75) 橋川, 同前, 同頁上段二三行目の次に入る文章。
- 76) 橋川, 同前, 同頁下段一行目の前に入る文章。
- 77) 橋川, 同前, 同頁下段一行目, 注 76 の次に入る文章。
- 78) 橋川, 同前, 同頁下段一行目, 注 77 の次に入る文章。
- 79) 橋川, 同前, 同頁下段三行目/四行目。
- 80) 橋川, 同前, 同頁下段二二行目/二三行目。
- 81) 「慶應義塾福澤研究センター蔵・橋川文三関係資料目録」13-9-43 一般文書(ノート),
Gedanke und Reflexion (Nr. 10) April 10, 1950- June 13, 1950
- 82) 橋川, 一九八九, 六五頁上段二〇行目/二一行目。
- 83) 橋川, 同前, 同頁上段二二行目「愛の苦しみ, それは普通に自尊心の苦しみという卑俗な形をとる。」/「虚飾なかれ!」。
- 84) 橋川, 同前, 同頁下段一行目/二行目。
- 85) 橋川, 同前, 同頁下段三行目/四行目。
- 86) 橋川, 同前, 同頁下段一二行目/一三行目。
- 87) 橋川, 同前, 六六頁上段一三行目「幸福なコドク感。」/「十二時すぎ帰宅。」。
- 88) 橋川, 同前, 同頁下段一二行目/一三行目。
- 89) 橋川, 同前, 六九頁上段七行目/八行目。
- 90) 橋川, 同前, 同頁上段八行目/九行目。
- 91) 橋川, 同前, 同頁上段一〇行目/一一行目。
- 92) 橋川, 同前, 同頁上段一五行目/一六行目。
- 93) 橋川, 同前, 同頁上段二〇行目/二一行目。
- 94) 橋川, 同前, 同頁下段四行目「荒川と話。」/「夕方金策…」。
- 95) 橋川, 同前, 同頁下段七行目「…考えるくらいゆううつ。」/「南氏に電話…」。
- 96) 橋川, 同前, 同頁下段一一行目/一二行目。
- 97) 橋川, 同前, 同頁下段一九行目/二二行目。
- 98) 橋川, 同前, 七〇頁上段一行目/二行目。
- 99) 橋川, 同前, 同頁上段四行目/五行目。
- 100) 橋川, 同前, 七二頁下段一一行目「Sがよく苦勞したということを云っていた。」/「ヒステリックということも咎むべき何ものでもないと思う。」。
- 101) 橋川, 同前, 同頁下段一二行目「ヒステリックということも咎むべき何ものでもないと思う。」
/「唯Sがもう少し感受性が純正であつたらと思う。」。
- 102) 橋川, 同前, 同頁下段一四行目「夕方f来る。」/「かの女の歌をきく。」。
- 103) 橋川, 同前, 同頁下段一五行目「なんということもなくおしゃべり。」/「澁谷まで歩いて送る。」。
- 104) 橋川, 同前, 七三頁下段一七行目/一八行目。

一九五〇年の橋川文三日記（須藤）

参考文献一覧

橋川文三，「日記 1949-1951」井上光晴編集『辺境』1989年7月終刊号，2-104 ページ。

慶応義塾福澤研究センター編集・発行『橋川文三氏旧蔵書籍目録（通称橋川文庫）』，1997 年。